

# ラルフ・エリスンの『見えない人間』における 不定形の働き

藤 野 功 一

## はじめに

Ralph Ellison (1913-1994) の長編小説『見えない人間』(*Invisible Man*, 1952) では、主人公である語り手が冒頭近くで「僕は見えない人間だ。人々が僕を見ることを拒否するんだ」<sup>1</sup>と訴えるため、しばしば、「理想主義的な若い黒人」(Podhoretz 50) である主人公が、黒人ゆえに無視される状況の中で、自己の自発性 (spontaneity) やアイデンティティ (identity) を人々に認めてもらうことを目指す教養小説であると解釈されてきた。<sup>2</sup>しかし、テキストをよく読むと、主人公の自発的な才能の表れである即興演説はしばしば人々に賞賛され、また、その弁舌の結果もたらされるアイデンティティは、その場の人々に明らかなものとして扱われている。むしろ、それらの意味や価値が常に他者によって左右されてしまう点が主人公の苦悩を招いているようだ。主人公は目の前にいる聴衆の反応にあわせてその場で最も適切な言葉を繰り出す才能に溢れており、だからこそ、その時々でなされる弁舌によって醸し出されるアイデンティティの背後でうごめいている働きが見えなくなってしまう。

例を一つ挙げてみよう。小説の中盤、南部からニューヨークのハーレムへとやってきた主人公はふとしたきっかけから政治団体「ブラザーフッド」の一人員となり、群衆を前に即興的な演説を行い、「嵐のような喝采」(IM 346) を受ける。主人公はその時、演説時の言葉が「自分のみぞおち (my solar plexus)」から出てくるように感じ (IM 345)、「自分がより人間らしくなった (I am more human)」(IM 346) と語って、自分のアイデンティティを見出したように感じ

るところが、その直後、「ブラザーフード」の上司からそのような演説は「最悪だ (The worst you could have done.)」との評価を受ける (IM 349)。彼の演説は科学的な手法とは正反対のもの (the antithesis of the scientific approach) であり、人々を「暴徒 (a mob)」にしてしまうだけだ、と酷評される。(IM 350)。そして、彼は黨員からトレーニングを受けなければならなくなるが、それは「人々が聞きたいこと」を言って、聞いた人たちが「ブラザーフード」の思惑通りに動くようにすることだと命ぜられる (IM 359)。即興的な演説で主人公が自分の自発性を見出したと思った途端に、それは単なる聴衆の欲望の反映に過ぎないことを思い知らされ、彼はブラザーフードという組織の指導のもと、自分の見出したアイデンティティとは別のアイデンティティを演説で示さなければいけないことになる。そうなると、プスカーが論じるように、この小説では、主人公の言葉の即興性というのは「まことに形式的なものに過ぎず、ただ他の人々の考えに左右されるだけのもの (purely formal, merely channeling the ideas of others)」であり (Puskar 86)、主人公の一見すると自発的な言葉は、ほんとうは「聴衆の聞きたいこと」や、あるいは「ブラザーフード」の思惑といった、他者の考えにのみ関連して成り立つことがあらわになってしまう。この場面で示される、主人公の自発性と彼のアイデンティティをめぐる皮肉な状況は、『見えない人間』の初めから終わりまで、一貫して様々な形で現れ、『見えない人間』がどのような主題を追求しているかを示唆している。

『見えない人間』で、主人公が社会活動団体「ブラザーフード」の一員となった後に行ういくつかの即興演説において示される主人公の自発性と強烈なアイデンティティは、その場その場においては明瞭で、周囲の人々に明らかなものとして扱われる。しかも、ブラザーフードの団員たちは、あたかも機械を修理でもするかのように、主人公にトレーニングを施せば、その演説方法やアイデンティティは「ブラザーフード」の思惑通りに矯正可能だと考えている。すると、主人公の自発性や、あるいは主人公のアイデンティティは、主人公にとっても、あるいは周りの人々にとっても、格別見えないものではないし、主人公がここで読者に理解して欲しいと思っている「僕の不可視性 (my invisibility)」 (IM 3) とはちがう、ということになるだろう。むしろ、それらに収斂される

ことのない、自分をもつ不定形な働きを主人公は見つめているように思える。そこで、ここでは、まず、自発的な即興 (improvisation) や、アイデンティティというものが、エリスンのテキストで具体的にどのように描写されているかを検討したうえで、自発的な即興でもなく、アイデンティティでもないものとしてエリスンが描こうとしている主題、すなわち、主人公の「不可視性」とは何かを改めて探してみたい。

議論に入る前に、あらかじめ、ここで利用する理論と、予想される結論を述べておこう。この論では、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートが『コモンウェルス』で示した流動的な社会における個人の「働き (agency)」についてのアイデアを参考にしながら考察を進めている。かつてはエリスン自身も深く関わったマルクスの思想を継承発展させたネグリとハートは、『コモンウェルス』で、固有のアイデンティティや、私的所有を土台とした制度への愛着を捨てきれない私たちの状況を批判しながら、おそらくこれからの国境を超えたネットワークに基づく民主主義的發展においては、アイデンティティは「制度をとおしてつくられる」ものではないし、また、「アイデンティティ」が「人種やジェンダー、階級の属性に順応することがあたかも自然であり、必要不可欠である」という前提のもとに「規定」されるようなものではないと論じた (358)。ネグリとハートは、これからの制度は次々と変化するプロセスのなかでとらえられるべきもので、この制度のプロセスに参加する存在は、アイデンティティをもつ存在というより、時にお互いに抗争し、絶えず自己変容のプロセスにさらされている互いに異なった性質をもつ「特異点 (singularity)」(125) によってなされる「働き (agency)」(358) であると考えている。

ネグリとハートは、社会学の観点から、個人の「働き」によって社会の制度が変革され、そのために制度が絶えず流動する状況を現在の世界像として提示している。しかし、このような世界観は、すでにエリスンの『見えない人間』の中に描かれていると言っても良いだろう。ネグリとハートが「特異点 (singularity)」(125) によってなされる「働き (agency)」(358) と呼んでいるものは、エリスンの『見えない人間』の中では、「黒い不定形なもの (a black amorphous thing)」として表現されている。主人公が常に「黒い不定形なもの」

として描かれたために、この小説の「不可視性 (invisibility)」は捉えにくいものとなっているのではないだろうか。さらに、形式と内容の不一致、すなわち、一見すると主人公がその即興的な演説の才能を開花させながら自己のアイデンティティを追求する教養小説的な印象を与えながら、実際には主人公が自己をアイデンティティではなく、むしろ自己の不定形な働き (amorphous agency)<sup>3</sup> を自覚しながら、社会制度の変革に関わる責任を自覚するところでおわるという構造を持っているため、この小説の「不可視性 (invisibility)」という主題は、理解しにくくなっているのではないだろうか。

この論ではまず、もともとはジャズの用語であり、しばしば自発的な才能の表れであるはずの「即興 (improvisation)」という言葉がエリスンのテキストの中でどのように使われているかを検証して、<sup>インプロビゼーション</sup>即興という言葉によってエリスンが名指しているものは実際に何なのかを明らかにした上で、『見えない人間』において即興的演説をおこなう主人公のアイデンティティがどのように描かれているかを述べる。次に、『見えない人間』において主人公はどのようなプロセスを通じて自分を社会の中の特異点、あるいは不定形な働きを行う存在として意識するようになったかを確認したうえで、そのような主人公の「不可視性 (invisibility)」、あるいは不定形な働き (amorphous agency) とでも呼ぶべきものは、どのように評価されるべきか、ということを論ずることとしたい。

## <sup>インプロビゼーション</sup>1. 即興、あるいは複製芸術時代のコラージュ

まず、エリスンによるテキストにおいて、人々の行う<sup>インプロビゼーション</sup>即興がどう表現されているかを見てみよう。プスカーも言うように、ジャズの専門家であったエリスンは、自分の文学に、<sup>インプロビゼーション</sup>ジャズの即興の技法を導入しようとしているように見える (86)。具体的には、エリスンの文学では、<sup>インプロビゼーション</sup>音楽的な用語であった即興は、視覚的なイメージや、人々の口から次々と繰り出される言葉によって表現されている。

わかりやすい視覚的なイメージの例のひとつをここで取り上げてみよう。1973年に短編「キャディラック・フランベ (“Cadillac Flambe”）」として発表され、エリスンの死後に、<sup>ジュネットーン</sup>長編『黒人解放奴隷宣言記念日 (Juneteenth)』の

一部として編入されたテキストに、エリスンが思い描くインプロビゼーション即興がどのようなものかを自動車の描写によって視覚的に描き出した部分があり、黒人が自分たちで手作りして乗り回している、どの車とも似ても似つかない車が、次のように表現されている：

それはキャデラックでも、リンカーンでも、オールズモビルでも、ピュイックでもなかった。あるいはそのほかのどんな車にも似ても似つかなかった。それは一台どころではない、いくつもの車のシャーシや車輪やエンジンやフードやクラクションやらを好き勝手につなぎ合わせたものだった！いわばそれはガラクタ置き場で組み立てられたマシンだ。インプロビゼーションつまりは即興で、クロンボの出来損ないが作った胡散臭い創作物ってやつだ—それでも、それは並々ならぬ改造車だった。

極めて印象的な描写だが、特に、この描写の中で、インプロビゼーション「即興」とされる黒人の車が、様々な車の部品の寄せ集めであることに注目しよう。この部分を読む限り、エリスンにとって、インプロビゼーション即興は、それまでになかったものを一から作り出すような、インプロビゼーション新たな創出ではない。むしろ、この車の場合の即興は、様々な既製の車の部品を寄せ集め、うまくつなぎ合わせることによって、走る機能をあたえようとする行為を指している。インプロビゼーションここで、即興が、エリスンの想像力の中においても、一つ一つの部品が、すでに既製品のものであり、いくつものその他の車のシャーシや車輪やエンジンやフードやクラクションやらから出来上がっていることに注目しておこう。

インプロビゼーションエリスンの即興のイメージが、様々な再生可能な複製生産物の断片から成り立っていることは、インプロビゼーションエリスンの即興についての考えを理解するのに重要な点だろう。インプロビゼーションエリスンにとって、即興は独創的な芸術を一から作り上げることを意味しない。むしろ、その根底にあるのは、既製の複製生産物をつなぎ合わせ、コラージュするという感覚である。<sup>4</sup>そしてこのようなコラージュと同じ感覚で、『見えない人間』の後半においても、主人公の即興演説は、すでに彼にとって既製のものである要素を、別の新しい既製の要素と組み合わせて作り出され

る。たとえば、「ブラザーフッド」の演説者として聴衆の前に立ったときも、彼は自分の演説を、「以前からの古いやり方 (in a very old-fashioned way)」で語りながら、同時にその演説の内容を、聴衆の反応を見ながら、聴衆からヒントとして与えられた言葉を取り入れて行うという即興的な演説のやり方をして、「聴衆が最初から自分と共にいる (They had been with me from the first word.)」(IM 353) という経験をする。つまり、彼は、手法としては自分が以前から確立している語り方を維持しながら、同時に、その内容としては、聞き手から与えられた言葉をすぐさま取り入れて語るのだ。こうして、主人公は「彼らの聞きたいことを語り、聞き手は彼の言葉を理解する。僕は彼らと一体になる (I had spoken for them and they had recognized my words. I belonged to them.)」(IM 353) という幸福な経験をすることになる。この時の主人公の演説は、独創的なものというよりは、むしろ常に何らかの制度のもとでの訓練と、他人の反応の中で生まれたものと言えるだろう。<sup>5</sup> その演説は、自分よりは他人の基準と思考に合わせた言葉であるため、演説を終えた後、思い返してみても、主人公には、自分の行った演説が、自分のものではなく、「他人の表現 (the expression of someone else)」であるかのように思えてくる (IM 353)。そして、主人公は、「もしも誰かが速記を記録してくれていたなら、それを明日自分で見ることができだろう ([If it was recorded by a stenographer, I would have a look at it tomorrow.])」と考える (IM 353)。すでに主人公は、即興的に語られた自分の語りが自分にも完全には制御できない他人との関係の中で作られた一時的なものであることを自覚し、その即興の効果を十分に確かめるためには、何らかの複製技術に基づいた、自分の言葉の完全な記録が必要だと感じている。

主人公の即興は、こうして、その即興性が見るとつよく語り手の自由と自己主張を示唆しているにもかかわらず、実際に主人公の即興を支えているのは、すでに既製のものとして出来上がった演説の様式と観客の言葉と反応であり、その内容を完全に把握するために必要なのは、複製技術によって可能になった反復可能な記録だということが示される。

インプロビゼーション

即興とその効果を確かめるために、複製技術による再現が前提とされているという状況は、この小説の中におけるジャズ音楽の扱いにも表れている。プス

カーも指摘しているように、この小説にはしばしばジャズへの言及があるものの、それらはすべて、すでに複製され、大量生産された既製品として出回っている、レコードの曲である。

この小説はジャズ音楽に満ちてはいるものの、ジャズ演奏家の生演奏を描写する場面は一つもない。オルガン音楽の生演奏、ブルースの歌や、ブギウギで歌う教会の賛美歌などが出てはくるものの、主人公はジャズを自分が閉じこもる地下の部屋のラジオ蓄音機で聞いたり、ジュークボックスのいかした音で聞いたり、レコードショップの大音量のスピーカーで聞いたりしているだけだ。この小説には、ジャズの即興インプロビゼーションの自発性や自然さを示すような純粹で普通の人間の声というものは描かれない。なぜなら、純粹で自然な自己そのものが、そういうものを出現させるシステムがなければありえなかったものだからだ。プロローグに出てくるラジオ蓄音機でさえ、最初は自由を象徴する機械に見えたものが、小説の最後では、一種のアイデンティティ製造装置になってしまっている。蓄音機のジャズ音楽は実際には以前に行われた演奏の再生であって、同じように、何度もリハーサルを重ねた上で録音された演奏でしかない。(Puskar 89)

プスカーもいうように、主人公の聞いているジャズインプロビゼーションの即興でさえ、すでにそのスタイルは固定化され、なんども練習され、反復可能なレコードで聴ける技法として確立してしまっている。このような状況の中では、もはやジャズのレコードの即興演奏が、不定形で、見えないものを象徴するとはとてもいえないだろう。また、そのジャズ・レコードで確かめられる演奏家のアイデンティティというものも、すでに技法として確立され、アイデンティティ製造装置によって全体が反復可能な状態で確認できるものだ。このように複製技術を前提とした美学にもとづいて、『見えない人間』では、主人公のアイデンティティとその即興インプロビゼーションは、記録され、はっきりと確認でき、見えるものとしてえがかれているということになる。それらは、主人公にとっても、決して「見えないもの」ではないのだ。それでは、エリスンは、あるいはこの小説の主人公は、この小説

でどのようなものを「見えないもの」と考えているのだろうか。それについて次に考えてみよう。

## 2. 不可視性 (invisibility)、あるいは結び目

『見えない人間』の主人公が「ぼくの不可視性 (my invisibility)」(IM 3) という言葉で表現しようとしているのは何なのか。この点を考察するのに、おそらく一番効果的な方法の一つは、『見えない人間』の作品における、レイ・アームストロングについての言及だろう。『見えない人間』の冒頭で、主人公はレイ・アームストロングの音楽への愛着を次のように表現する。

ぼくは今ラジオ蓄音機を一台もっているけれど、5台は欲しいと計画しているところだ。ぼくの隠れ家は全くの防音状態なので、音楽を鳴らすときはその振動を、耳でばかりでなく体全体で感じる。僕はレイ・アームストロングによる「黒いがための憂鬱 (“What Did I Do to Be So Black and Blue”）」の演奏と歌のレコード5種類を聞きたいと思っているんだ……全部いっぺんにね。いまでは、時々、レイの演奏を大好きなヴァニラ・アイスクリームとスロー・ジンをいっぺんに味わいながら聴いている。レイがトランペットを傾けて情熱的な音を出すのを聞きながら、赤い液体を白いアイスクリームにかけて、それが煌めきながら蒸気をあげるのをみている。多分、僕がレイ・アームストロングを好きなのは、彼が見えないものからその詩情を作り上げているからなんだろう。たぶん彼は自分が見えないなんてことは考えていないからそれができるんだと思う。僕のほうも、自分が見えないということを理解しているので、彼の音楽が理解できるんだ。あるとき、煙草をくれという、どこかのふざけた野郎がマリファナ入りの煙草をくれた。それに火をつけて家に帰って、蓄音機の音に耳を傾けたんだ。それは奇妙な夕暮れの経験だった。ちょっと説明させてもらうと、見えない存在でいると、少々人とは違った時間の感覚をもつことになる。リズムにノリきれないんだ。ときどき先ばしりすぎるし、あるいは遅れをとる。すばやい、感知不能な時間の流れの代わりに、音の結び目や、音楽



が少々立ち止まったり、つぎにどう飛躍しようかと一瞬思案する節目などを意識してしまう。そうして、時間の裂け目に滑り込んで、辺りを見回す羽目になるんだ。レイの音楽をぼんやり聴くっていうのは、そういうことなんだよ。(IM 7-8)

ここで、主人公が注目しているのが、音楽の「すばやい、感知不能な時間の流れ (the swift and imperceptible flowing of time)」ではなく、むしろ「音の結び目 (nodes)」や、「音楽が少々立ち止まったり、つぎにどう飛躍しようかと一瞬思案する節目 (those points where time stands still or from which it leaps ahead)」であることに注目しよう。どうやら、これらの結び目、節目という表現によって、この小説の中で主人公が感じ取っている、見えないものが具体的に示されているようだ。様式と様式のつなぎ目を決める意識。すでに既存のものの中から、あるものを選び、そこから、またべつのものに移りゆくための決定の動き。その決定を下すための働きを、主人公はレイ・アームストロングの複製されたレコードのなかで見出そうとしている。

実際に演奏を聴いてみるとわかるのだが、レイ・アームストロングの「黒いがための憂鬱 (“What Did I Do to Be So Black and Blue”)」で歌われる歌詞は、大変暗い、絶望的な内容である。ここで、原詞とその対訳を示してみよう。

“What Did I Do to Be So Black and Blue”

「黒いがための憂鬱」

Cold empty bed, springs hard as lead

冷たくて無人のベッド、鉛のように硬いスプリング

Feels like ol' Ned wished I was dead

ネッドの旦那は俺なんか死んじまえばいいと思ってるんだろう

What did I do to be so black and blue

俺にどうしろってんだ、この真っ黒でブルーな気持ちを

Even the mouse ran from my house

ネズミまで俺の家から逃げていく

They laugh at you and scorn you too

みんなが俺を笑って軽蔑する

What did I do to be so black and blue

俺にどうしろってんだ、この真っ黒でブルーな気持ちを

I'm white inside but that don't help my case

俺の心は汚れもない真っ白、だからって俺の問題は解決しない

'Cause I can't hide what is in my face

だってこの顔の色は、隠しようがないからさ

\*How would it end, ain't got a friend

どうしたらこの苦しみは終わるんだろう、俺には友達もいないのに

My only sin is in my skin

俺のただ一つの罪はこの皮膚の色さ

What did I do to be so black and blue

俺にどうしろってんだ、この真っ黒でブルーな気持ちを

\*repeat

この暗い歌詞を歌うにあたって、卓越したエンターティナーであるルイ・アームストロングは、誰もが楽しめるように、明るい調子のイントロダクションで始める。そして、そのあいまに差し挟むみずからの歌声に深刻な歌の雰囲気や垣間見せはするものの、しかし、最後にはまた陽気なトーンへと戻って、彼お得意の明るいトランペットの音で締めくくる。ルイ・アームストロングの音楽において、インプロビゼーション即興はある一つの様式から次の様式への結び目をなし、音楽全体を支える重要な要素となってゆく。この一つの様式から次の様式を結びつけるやり方、あるいは一つの気分から次の気分へと、あたかも即興のように跳躍してゆく働きが、『見えない人間』の主人公における「不可視性 (invisibility)」と

重なり合う。

ルイ・アームストロングの音楽にみられるような、目に見える一つの様式から別の目に見える様式へと移り変わる不定形の働きは、『見えない人間』の主人公の人生における出来事の描写でもその最初から重要な要素として描かれている。この点を検証するために、まず、『見えない人間』の主人公の生涯に大きく影響を与えた祖父の言葉をここで取り上げて、『見えない人間』の主人公が、最初にどのような言葉で自己の不定形の働きを意識し始めたのかをみてみよう。主人公が十代のころ、祖父は、臨終のまくらもとに主人公の父親を呼んで、次のように遺言する。

息子よ、白人との戦いを続けてくれ。今まで話したことはなかったが、我々黒人の人生は白人との戦いの連続だった。わしは生まれた時からその戦いの中での裏切りもので、南北戦争後の再建期の時に銃を持って戦うことを諦めてから、敵の白人の国でスパイのように生きてきた。お前も、ライオンの首の中に頭を突っ込んで生きるような道を歩むだろう。お前には、ハイハイと奴らの言うことを聞いておきながら、白人たちに打ち勝つ道を歩いて欲しい。にっこり笑って、奴らの土台を掘り崩すんだ。奴らの言うことを聞いて、奴らを死と破滅に追い込むんだ。奴らにお前を飲み込ませて、奴らが嘔吐したり、内側から破裂させたりするがいい。(IM 16)

ドエインもいうように、周囲の人々はこのような危険な祖父の言葉に戸惑い、主人公に「断固として (emphatically)」祖父の言葉を忘れるように忠告する(Doane 163)。しかし、主人公はこの言葉を聞いてからずっと祖父の言葉にこだわり続け、この小説の最後の場面でも、やはり祖父の言葉を思い出す。祖父の言葉は、主人公の生き方に大きな影響を与えているが、ここで主人公の祖父が、そもそも相手を完全に破壊する暴力の象徴である銃を捨てた後の戦い方について述べているのは示唆的だろう。祖父は自分の子孫に向けて、「ライオンの首の中に頭を突っ込んで生きるような道」を歩めと言っているが、それは、自分をかみ砕こうとする制度の中にいながら、その制度を打ち壊すことなく、生

きる方法を伝えているかのようだ。つまり、主人公が他人からは見えない働きを保ちながら生きていくその方法は、暴力的な行為によって古いものを完全に破壊し尽くして、まったく新しいものを作り出すような働きではない。むしろそこにあるのは、スパイや裏切り者のように、一つの制度、言葉、技術の中に生きていながら、次の瞬間には、それとは全く別の制度、言葉、技術へと順応し、それを使い、その両方のどちらをも利用しながら、全体を機能させてゆく能力である。

主人公は、祖父の言葉に従い、白人との関係を良好に保ちながら優等生として学校生活を送ることに成功するのだが、自分の人生がうまくいくごとに、祖父のアドバイスを思い出して、まるで裏切り者であるかのような、「罪悪感と居心地の悪さ (guilty and uncomfortable)」にかられる (IM 16)。そして、彼は白人に気に入られる人格として自己を形成しながら、同時にそのアイデンティティに収斂されない働きを自分が持っていることを意識する。黒人学校に通い、優秀な成績を修めたために、白人達の前で演説する機会を与えられた主人公が演説をする場面で、それははっきりとあらわれる。

『見えない人間』の冒頭近く、優等生として白人の有力者たちの前で演説を披露する機会を与えられた主人公は、自分の演説を披露する前に、わけもわからぬままに白人相手の黒人少年たちによる見世物の乱闘に参加させられる。そして彼は乱闘が終わったのちに、やっと自分の演説をする機会を与えられる。そこで彼は最初、模範的な演説をやり遂げようと、あらゆるニュアンスを練習した通りに繰り返そうとするのだが、途中で詰まってしまう (乱闘で殴られてほおの内側を切られた血が、喉にからんでむせてしまうのだ)。彼は模範的な作文を暗記したままに読み上げようとするにもかかわらず、むせた途端に、つい、「社会的責任 (social responsibility)」を、「社会的平等 (social equality)」と言い間違えてしまう (IM 31)。すると、主人公は白人の聴衆から厳しくその間違いを訂正される。

主人公は自分の言い間違いに対する聴衆の反応を感じ取り、言葉をすぐに訂正して、もとのように「社会的責任」と言い換える。ただし、ここで重要なのは、主人公が「社会的責任」を、「社会的平等」と言い間違えたからといって、

それが彼の真の自発的な考えや、彼の隠し持っていたアイデンティティを示しているわけではない、という点だろう。むしろ主人公の「不可視性」は、もともとの暗記した原稿を読み上げようとしたのに、間違えて「社会的平等」と言い、そしてそれに対する聴衆の反応にに応じて、また元のように「社会的責任」と言いなおす、この模範からの逸脱とその修正をおこなう、全体を機能させている働きを指すものとなっていると考えたほうが良いだろう。白人の聴衆も、主人公のつまらない模範通りの演説にはそれほど関心を払ってはいないものの、主人公が模範通りに演説をしているかどうかを常にチェックしている。その証拠に、主人公が言い間違えをすればそれを目ざとく見つける。つまり聴衆には、主人公の模範的な演説ぶりも、その言い間違えも、その後の修正も、すべて見えているのだ。しかし、白人の聴衆が見逃しているのは、そしてこの時の主人公自身も捉え損ねているのは、「社会的責任」を、「社会的平等」と言い間違え、そしてすぐさま「社会的責任」と言い直すというその往復運動全体をとおしてあらわれている主人公の不定形な働きだろう。

エリスンの『見えない人間』の主人公は、この演説を終えたのち、彼自身の不定形な働きがどのようなものであるかを明確にできぬままに、様々な既製の制度に属しながら生きてゆく。南部の黒人学校で優秀な学業成績を収め、白人たちの前で演説を披露し終えた主人公は、「黒人にとって名誉ある人間 (a credit to the race)」(IM 255) となるべく、黒人大学に進むが、大学の理事であるノートン氏への不躰な振る舞いのために大学を出され、ニューヨークへ向かう。そこで一時的にペンキ工場で働くことになるが、そこでも再び上司の誤解から理不尽な扱いにあい、そこから逃れ、今度はその演説の才能を見込まれて、政治団体「ブラザーフッド」に所属し、演説に堪能な若手のリーダーとして雑誌にも紹介されるほどになる。しかし主人公はだんだんと、有名になって行く自分はただ他人から与えられた役割を演じているだけで、その行動において自分独自の考えや個性が発揮されているわけではないと感じる。自分は南部ではただの「黒人」のひとりであることを要求されていたが、ニューヨークに来て政治団体に入っても、結局自分はその教えを忠実に実行することを求められているだけでしかない。ついに彼は、自分自身が社会に与える働きを誰から

も見てもらえていない「見えない人間」であることを自覚する。主人公は、その不定形な働きのゆえに、常に自分が帰属している組織とその制度から裏切られ、あるいは自分から組織とその制度を裏切る。しかし、その時であっても、彼は、組織とその制度を徹底的に壊す破壊者とはならない。むしろ、既存の組織とその制度を利用し、あるいは裏切ることによってしか働かえないもの、として機能する。その彼が最後に行き着いたのがニューヨークのハーレムであり、そこで主人公は、あたかも必然であるかのように、自分がそれまでに行ってきたことを自覚的に行う人物、ラインハートに出会うのである。

それでは、ニューヨークのハーレムにおいて、ラインハートと邂逅したのち、『見えない人間』の主人公は自分をどのような働きとして認識するのかを、次に見てみることにしよう。あらかじめ言ってしまうと、主人公は自分の生き方が、結局はラインハートのようにいくつもの顔を持つ詐欺師のようになってしまうことに気づいて絶望するのだが、この小説の最終段階に至って、果たしてその絶望を回避する可能性をこの主人公は示しているのかを考えてみたい。

### 3. 「ラインハートせざるをえない」、あるいは「不定形な働き」の自覚

この小説では、一つの制度から別の制度、あるいは、一つのアイデンティティから別のアイデンティティへと変化してゆく主人公が、「黒い不定形なもの (a black amorphous thing)」と呼ばれる場面がある。まだ主人公が黒人大学の学生であった頃に、主人公と白人の大学理事のノートン氏が、退役軍人と会話をする場面がそれだ。この場面で、退役軍人は主人公と、主人公を自分の理想に合わせて教育しようとする大学理事のノートン氏との関係を、次のように表現する。

あんた達はどちらも、かわいそうならくでなしどもだよ、お互いに相手のことが見えちゃいない。[ノートン氏に向かって] あんたにとって、この黒人はあんたの教育的達成の到達表、道具みたいなもので、人間でさえない。子供か、それとももっと程度の低い、黒い不定形なもの (a black amorphous thing) でしかないのさ。それでな、お前さんは、大変な力を

持っていて、この黒人生徒にとってはもう人間でさえない、むしろ、神とか、力とか・・・。

どうやら気が狂っているらしいこの退役軍人は、しかし、この小説において「知恵に満ちた言葉を話す少数の人物の1人」(Valkeakari 181) といっているだろう。彼の言葉は主人公の働きのあり方を的確に捉えている。主人公は白人のノートン氏にとっては黒人の不定形な存在であり、指導すべき存在なのだが、それと同時に、生徒の成長がかえって教師を導くように、黒人の主人公はノートン氏の人生を導く存在でもある。それを、退役軍人は「じつに適切なことだ (it was fitting)」と言う。そしてこの退役軍人の言葉を再度確認するかのようになり、この小説の結末の幻想的な場面において、ノートン氏が再び登場するが、あたかも主人公の働きがノートン氏に人生の指針を与えることを示すかのように、主人公はノートン氏に「僕があなたの運命なのです (I'm your destiny.)」という (IM 578)。主人公は不定形な存在でありながら、人に対して未来の指針を示すものとなるのが、ここで示される。

あるいはこう言ってもいいだろう。不定形な存在というのは、どこに向かえば良いかわからない不安の中で、しかもなお世界の変化する方向性を求める存在である。たとえば、『見えない人間』の主人公は、ブラザーフッドの党員、片目のジャックとの殺伐とした会話の途中で、ジャックの義眼が外れて飛び出るのを目撃する。ジャックは落ちた義眼をつかんでコップの水の中に落とし、そしてふたたび義眼をつまもうとコップの水の中をさぐるが、その義眼は「滑らかで球状めいた、半ば不定形 (half-amorphous form) になって彼の二本の指の間からすべり、まるで出口を求めているかのように、コップの中を勢いよくぐるぐる回」る (IM 476-77)。この出口を求めてぐるぐる回る半ば不定形の義眼は、片目のジャックには、主人公の不定形な働きを見ることができておらず、現実の社会改革の方向性も本当は見えていないことを象徴しているが、それと同時に、そのようなジャックでさえも、出口がわからないながら社会改革の方向性を求めていることを示している。ジャックが新しい社会を期待していることは、この場面におけるジャックの「もしも俺たちが自分たちの仕事をうまく

やり遂げたら、新しい社会が俺に新しい生きた眼球を与えてくれるかもしれない ([If we do our work successfully the new society will provide me with a living eye.]) (IM 477) というジャックの願望にも表現され、また、主人公の「いったいどんな社会が彼(ジャック)に僕を見せるようにするのだろうか (what kind of society will make him [Jack] see me)」(IM 477) という問いに現れているだろう。この小説の中では、不定形な存在は、新たな社会を求める願望と常に結びついており、その社会とは、それまでの既製の制度や価値観では捉えきれない働きを目に見えるようにしたり、あるいは制度の中で評価したりすることができる社会であることが示される。

つまり、主人公にとって不定形な働きとは、社会の新たな制度を探すための動機となるものだ。主人公は、そのような不定形な自分の働きを意識しながら、自分の働きが目に見えるような「新しい社会 (a new society)」(IM 477) を求めるのだが、それを見つけ出すまでは、最終的には、やはり自分はラインハートのように生きざるをえない、原文通りにいうと、「ラインハートせざるをえない (I'd have to do a Rinehart.）」(IM 507) と考える。

ここで改めて、ラインハートとはどのような人物なのかを考えてみよう。この小説の後半、主人公は「ラインハート」と間違われて、街角である女性からは数当て賭博の結果について尋ねられ、またあるときは街の顔役として白人警官からいつものように賄賂を支払うように要求され、またあるときは若く美しい娘から親しげに腕を組まれ、そしてまた黒人教会に行くとはその教会の牧師として老夫人達から尊敬のこもった言葉を投げかけられる。主人公は「ラインハート」がハーレムでいくつもの顔を持つ男であることを知り、人間が時と場所に応じて様々な仮面をかぶり、それがどれひとつとして本当の自分でもないという人間を作り出す大都会の実体をまざまざと感じる。そして主人公はついに次のように考える。

ラインハートを装うのは自分には荷が重すぎた。僕は黒めがねを外し、白い帽子を脱ぐと注意深く脇の下に挟んで歩き去った。こんな事があっていいんだろうか、と僕は思った、現実にもこういう事があるなんて。でもこれ



が現実だっていうことは僕にもわかった。以前にもこういうことが現実にあるって事は聞いていたけれど、こうも間近に経験したことは一度もなかったってだけだ。でも、こんな事、本当にあるのだろうか。ラインハートという一人の男が、ある時はいかがわしい集金屋で、ある時は賭博師で、ある時は警官に賄賂を送り、ある時はかわいらしい女の彼氏、そうしてある時は教会の司祭様だなんて事が？ラインハート自身、その外面と中身が一致することがあるのだろうか。まったく、何たる現実なんだろう。(IM 498)

ラインハートは、複数のアイデンティティを持ちながら、その様々なアイデンティティのそれからそれへと移ろい、それによって全体の機能をうまく働かせている、詐欺師のような存在であることを、主人公は自覚する。そして、コミュニティのなかで安定したアイデンティティを持つことにいまだに魅力を感じている主人公は、かえって南部社会において自分が持っていた固有のアイデンティティを懐かしみ、ニューヨークで感じる無名性に嫌悪を覚えさせる。

しかし、ここで重要なのは、ラインハートに強い印象をうけた主人公は、そのような存在のあり方に恐怖を抱きながらしかし、のちには、やはり自分もそのような異様な存在、すなわち、社会の「特異点」となって「ラインハートせざるをえない (I'd have to do a Rinehart.)」(IM 507)、と考えるという点だろう。固定化したコミュニティの中で安定したアイデンティティを持つ状態に憧れる主人公にとって、様々な制度の中を渡り歩く「ラインハート」の存在は、社会の異端者であり、うさんくさい「特異点」である。しかし、「ラインハート」という存在に対して感じている嫌悪にもかかわらず、それでも主人公は、むしろ多様なアイデンティティの中で移ろう不定形の働きを、社会が求めており、そしてまた、主人公もまた、そのような働きとして存在せざるをえないことに責任を持つことが重要だと考えはじめる。

これまでの『見えない人間』の批評では、主人公が何らかの真の自己、あるいはアイデンティティを確立する過程として、この小説を読む批評が多く見られる。たとえばアーヴィング・ハウは、1970年に、この小説は「現代のアメリカ

かにおいて、黒人が成功と、人との交流と、そして最後には、自分自身を求める過程の高邁で高貴な過程である」(1) と述べ、また、今世紀に入ってから、たとえばマズラヴェッキエンヌも 2010 年の論文で『見えない人間』を論じる際に「結局、人間は、自分のアイデンティティとして個性的な人格を育てなければならず、そうでないと他人に認められないままなのだ」(45) と論じた。しかし、これらの批評は、『見えない人間』を、アイデンティティを確立しようとする人物の苦闘を描いた教養小説として読んでしまって、実際に『見えない人間』の主人公がなしている見えない働きを捉えそこなっているように思える。むしろ、『見えない人間』の主人公が言っている「僕の不可視性 (my invisibility)」とは、彼がひとつの「アイデンティティー (identity)」(IM497) や、「個性的な人格 (unique personality)」(Mazlaveckienė 45) を達成しえたと思った途端に見えなくなってしまふものだろう。

むしろ、主人公がその「不可視性 (invisibility)」として指し示そうとしているのは、既に確立したアイデンティティとアイデンティティの間に存在して、それらを解体し、再構成する働きを持つものだ。彼はハーレムでは、たとえば「ラインハート」という名のもとに、そういう働きがあることに気づく。その働きには完全な人格や、アイデンティティを見出すことはできない。しかし、むしろ社会変化のスピードが速く、社会の様々に矛盾した構造が隣り合わせに存在する都会では、人間は、おそらくこのような働きの示す「不可視性 (invisibility)」を保つことによってしか生きることができないことが暗示される。このようなみずからの不定形の働き (amorphous agency) に自覚的になるということ、そしてその働きがどのような経緯をたどるかを語ることに、主人公は責任を見出すのである。

## 結論

この小説の結末で、主人公は、みずからの不可視性 (invisibility)、あるいは不定形の働き (amorphous agency) にそれなりの社会的責任を負わなければならないことに気づき、「冬眠のように引きこもりすぎてしまっていること、それこそが僕の最大の社会的犯罪なのだろう。なぜなら見えない人間にだって、果

たすべき社会的役割の責任 (a socially responsible role to play) というものがあるだろうから」と考える。たとえ「見えないもの」としてしか機能できなくても、それに絶望して引きこもってばかりではなく、不定形の働きとして責任をもって社会的に生きていかなければならない、と主人公は考える。それは逆に言えば、しばしば各個人のアイデンティティに注目しがちであった私たちが見過ごしてきた、アイデンティティとアイデンティティの間にある働き、制度の変化をうながす働き (agency) に対して、彼が自覚をもってその働きを果たし、その働きがどのようなものかについて、実際に起こっていることを伝え続ける (try to tell you what was really happening) ことに責任を持つことを決意したということだろう (IM 581)。<sup>6</sup>それが、恐らくはあらゆることが様々な断片から成り立ち、あらゆることが複製再生産可能になりつつある時代の、主人公なりの自分の生への責任の取り方なのであり、歴史を前に動かすやり方なのだろう。<sup>7</sup>アイデンティティの確立をその目標とするのではなく、そしてまた、単純に黒人と白人との平等を訴えるわけでもないエリスンの小説は、私たちがしばしば陥りがちなアイデンティティ・ポリティクスにもとづいた読み<sup>8</sup>を否定する可能性を示した作品であり、また、黒人作家の小説を読むときに私たちが陥りがちな、単純なシヴィル・ライツ・ポリティクスにもとづいた読み<sup>9</sup>を乗り越える小説である。

\*本稿は、九州アメリカ文学会第64回大会(2018年5月12日、北九州大学)での口頭発表に、加筆・修正を施したものである。

<sup>1</sup> Ellison, *Invisible Man*, 3. 以下、このテキストからの引用は、本文中の括弧内に IM とともにページ数を示す。

<sup>2</sup> *Invisible Man* における主人公の自覚性についての議論は Hanlon 77, 87, Hobson 360, 主人公のアイデンティティについての議論は Avery 1, Boddy 30, Burke 66, Cloutier 296, Podhoretz 50 を参照。

<sup>3</sup> この論文のキーワードとして用いた、「不定形な働き (amorphous agency)」という用語は、ロバート・ギレットによる論集『ヨーロッパにおけるクイア』に掲載された David Nixon と Nick Givens の「英国におけるクイア (“Queer in England”)」から借用した。Nixon と Givens の議論において、「不定形な働き (amorphous agency)」は、

しばしば異性愛化された視点ばかりが強調される教育において、LGBT やトランスジェンダーをどう扱うべきか、あるいは、多様なセクシュアリティを教育においてどう扱うか、という問題を論じる文脈のなかで用いられている。だが、このような文脈において使われている、いわば自分の性的な働きが、既存の性差の概念になかなか分類されない状況を指す「不定形な働き (amorphous agency)」という用語は、より広く、社会において旧来の範疇のなかにははっきりとは分類できない様々な個人の働きを名指すのに有効な用語であり、また、アメリカにおけるエリスン以降の文学史における黒人作家による幾つかの作品の関連をはっきりとさせるのに有効な用語として使うことが可能だろう。それというのも、現代において、通常の読者は、つい、すでに「異性愛化された (heterosexualized)」文脈のなかで文学を読んでしまっている場合が多く、いわゆる異性愛者である主人公を扱う小説と、ホモセクシュアルやレズビアン主人公を扱う小説とを区別しがちであり、そのような視点に立ってみると、エリスンの『見えない人間』における主人公の悩みは、性的にノーマルな主人公の抱えるアイデンティティの問題としてのみ考えられてしまう。そのため、『見えない人間』の主人公が悩む問題は、たとえば黒人のホモセクシュアルの問題を扱ったジェームズ・ボールドウインの『もうひとつの国 (Another Country)』(1962) や、黒人のバイセクシュアルの問題を主題として扱ったE・リン・ハリスの『見えない生活 (Invisible Life)』(1994) との関連が、あまり強調されてきておらず、また、それらの文学との関連を論じるにせよ理論的にどのような土台に立った関連を想定すればよいのかは曖昧なままであった。しかし、エリスンの『見えない人間』と、ボールドウインの『もうひとつの国』、あるいはハリスの『見えない生活』は、どれも、主人公がいずれも自分の中にある「不定形の働き」をどう認識するかに悩むという点では、共通した主題が見出せる。このように、「不定形な働き (amorphous agency)」という用語は、より広く、社会において旧来の範疇のなかにある、はっきりとは分類できない様々な個人の働きを名指すことによって、文学史上においても、あるいは理論的なつながりにおいても、エリスンの『見えない人間』と、ボールドウインの『もうひとつの国』、そして、ハリスの『見えない生活』を関連付けて論じることを可能にして、いずれの作品も、主人公が自分の中にある、名づけ得ない働きに悩む話として捉えることを可能にするだろう。「不定形な働き (amorphous agency)」というキーワードによって、『見えない人間』の主人公の「不可視性 (invisibility)」を捉えることにより、エリスンの作品を他の多様な黒人文学と関連付け、その歴史的発展の過程を明らかにすることも可能ではないかと思われる。

<sup>4</sup> エリスンの文学は、この時代の複製芸術と深いつながりがあった。たとえば、ランパーサッド (Rampersad) によれば、作家として、そして知識人としてのエリスンの人生に大きな影響を与えた著作の一つは、1941年に発表された、リチャード・ライトによる写真とドキュメンタリーを組み合わせた作品『千二百万人の黒人の声』(12 Million Black Voices)であった(144-45)。実際、エリスンが作家としての成長を果たした1920年代から1940年代は、あらゆる複製生産物によって、アメリカが満たされた時代である。出版物においては、それは特に視覚的イメージである写真において顕著に示され、ブレアも述べるように、エリスンの時代は、「社会の様々な生活のありさまをうつしと

る美学が、その当時の代表的な写真によって定められた時代 (a historical moment when the aesthetics of public life were deeply indebted to photographic canons)』(17)でもあった。

<sup>5</sup> エリスン自身、作家連邦プロジェクト (Federal Writer's Project = FWP) の一員となったさいに、ハーレムの人々の語りを自分の文章に正確に写し取る技術を発達させて、彼自身の作家としての素養を身につけた。バスコムも言うように「作家連邦プロジェクト時代におけるインタビューによって、エリスンは、のちに自分の小説である *Invisible Man* でより洗練した形で用いることになる、黒人の語り言葉を書き文字によって捉える実験的方法を始めた」(34) のであり、いわばエリスン自身も、他人の言葉を正確に、いわば再生可能なものとして記録する人間として訓練しながら、彼自身の小説を書く準備をした。このような経験の中でエリスンが見つめ続けていたのは、他者の発言を記録し続ける自分の働きの意味ではないかと思われる。エリスンのしていたことはまさに都会において複製技術を持つ存在として機能しながら、情報を生産するという生産行為なのだが、おそらくエリスンは、都会では、それがたとえ言葉であれ、音楽であるにせよ、何らかの生産を行うことは、それ自体が、どうやら常に社会を改革することを含んでいることを感じたのではないだろうか。ハーレムの黒人がアメリカへの不満を口にするのをそのまま忠実に写し取って出版するだけで、それはアメリカという国家への痛烈な批判になることは容易に想像がつく。例えばバスコムの編集による、エリスンの FWP 時代のインタビューを読むと、都市で情報を取材し、その語られた言葉を再生産するというだけのことが、常に革命的なものをふくむことになることが強く感じられる。このような情報の複製と再生産という行為を通じて、エリスンは、それまでであれば公の記録には残ることのなかった人々の言葉を記録し、そうして胡散臭いものでしかないものの働きの公式に認めようとする働きの中から、社会の改革が行われるということを感じ取っていたのではないだろうか。

<sup>6</sup> 胡散臭い不定形な働きに名前を与えて語り、歴史に記録すること自体が、現実の制度を変革し、そして世界を変える力にさえることは、これまでの様々な歴史が証明している。たとえば 16 世紀から 17 世紀のイギリスは、それまでであれば犯罪行為として取り締まらなければならないはずの様々な荒くれの船乗りたちの略奪行為を、富国強兵のために利用し、多くの海賊を「探検家 (explorers)」、「航海家 (mariners)」、「冒険商人 (merchant Adventurers)」などの名前のもとに認め、さらにのちには国家的な海上における略奪行為を「私掠船 (privateers)」として合法化することによって、自国をスペインやポルトガルを凌駕する大英帝国にまで育て上げる基礎をつくった。この過程の中で、無名の海賊として出発しながら、16 世紀にイギリス人として初の世界一周航海に成功してエリザベス女王の時代の Visible な英雄となった典型例は、サー・フランシス・ドレーク (1543 - 1596) である。あるいはまた、アメリカの発見も、コロンブスによって行われたといわれているものの、すでにそれ以前のいくつかの漁船、商船、遠征隊の働きによってアメリカ大陸の存在が知られていたのであり、それゆえ、コロンブスという名前自体、のちの歴史制度の中でそれらの働きの名指すために固定化された象徴的な名前として認識したほうが良いということ、私たちはすでによく知っている。これらは、歴史が、名もない様々な不定形の働きに名前をつけ、制

度化することによって前進してきた典型的な例といえるだろう。

<sup>7</sup> 見えない、不定形な働きに名前を与え、その情報を流通させることで、世界に変化が起きている例は、今現在でも起きている。たとえば現在の経済活動に大きな影響を与えつつある仮想通貨であるビットコインは、現代の「見えない人間」の働きが、世界の制度を変革しつつある典型的な例だろう。すでによく知られたことだが、ビットコインの理論的基礎づけを行った人物が誰かははっきりとはわかっていない。ビットコインについての論文の筆者はサトシ・ナカモト (Satoshi Nakamoto) という匿名の人物で、この人物が実在するのか、この論文が1人の人物によって書かれたものなのか、複数の人物の参加するグループによって書かれたものなのかさえ、現在のところは不明である。そしてこの見えない人間の論文によって理論的に基礎付けられて登場したビットコインは、デジタル端末の普及、インターネット・ネットワーク、情報の暗号化、IDとパスワードといった、既存の技術の組み合わせによってできている。つまりビットコインとは、「見えない人間」によってつくられ、既存の技術のコラージュによって形作られる領域のはっきりとは定まらない働きとして生まれ、そして今やそれが社会全体に影響を及ぼし、その法制化と制度化が急がれているものと言っていいだろう。このような世界の動きを考えると、エリソンが『見えない人間』において考えようとした、不定形の働きとその効果は、未だに考察すべき課題を含んでいると思われる。

<sup>8</sup> エリソンの作品を identity との関連から論じたものとしては、Dinerstein, Barrett, Parrish, Hardin の論文を参照

<sup>9</sup> エリソンの作品を civil rights politics との関連から論じたものとしては、Bland と Mills の論文を参照。

## 参考文献

- Avery, Tamlyn E. "The Crisis of Coming of Age in Ralph Ellison's *Invisible Man* and the Late Harlem Bildungsroman." *Limina* 20.2 (2014) : 1-17.
- Baldwin, James. *Another Country*. New York: Vintage, 1990.
- Barrett, Laura. " 'Mark My Words': Speech, Writing, and Identity in Three Harlem Renaissance Stories." *Journal of Modern Literature* 37.1 (2013) : 58-76.
- Blair, Sara. "Ellison, photography, and the origins of invisibility" *The Cambridge Companion to Ralph Ellison*. Ed. Ross Posnock. New York: Cambridge University Press, 2005. 15-44.
- Bland, Sterling Lecater, Jr.: "Being Ralph Ellison: Remaking the Black Public Intellectual in the Age of Civil Rights." *American Studies* 54.3 (2015) : 51-62.
- Boddy, Kasia. " 'Fighting words': Ralph Ellison and Len Zinberg." *American Studies* 54.3 (2015) : 23-34.
- Burke, Kenneth. "Ralph Ellison's Trueblooded *Bildungsroman*." *Ralph Ellison's Invisible Man: A Casebook*. Ed. John F. Callahan. Oxford: Oxford UP, 2004. 65-80.

- Cloutier, Jean-Christophe. "The Comic Book World of Ralph Ellison's Invisible Man." *Novel: A Forum on Fiction*. 43.2 (2010) : 294-319.
- Dinerstein, Joel. " 'Uncle Tom Is Dead!': Wright, Himes, and Ellison Lay a Mask to Rest." *African American Review*. 43.1 (2009) : 83-98.
- Ellison, Ralph. "Cadillac Flambé." *American Review* 16 (1973) : 249-69.
- . *Invisible Man*. 1952. New York: Vintage, 1995.
- . *Juneteenth*. 1999. Ed. John F. Callahan. New York: Penguin, 2016.
- Hanlon, Christopher. "Eloquence and Invisible Man." *College Literature* 32.4 (2005) : 74-98.
- Hardin, Michael. Ralph Ellison's "Invisible Man": Invisibility, Race, and Homoeroticism from Frederick Douglass to E. Lynn Harris. *Southern Literary Journal* 37.1 (2004) : 96-120.
- Hardt, Michael and Antonio Negri. *Commonwealth*. Cambridge: Belknap, 2009. (ネグリ, アントニオ／マイケル・ハート『コモンウェルス』上下 水嶋一憲ほか訳 東京: NHK出版, 2012.)
- Harris, E. Linn. *Invisible Life: A Novel*. New York: Anchor Books, 1994.
- Hobson, Christopher Z. "Ralph Ellison, *Juneteenth*, and African American Prophecy." *Modern Fiction Studies* 51.3 (2005) : 617-47.
- Howe, Irving. *Decline of the New*. New York: Harcourt, 1970.
- Mazlaveckienė, Gerda. "Postmodern Elements of Character Portrayal in Ralph Ellison's Novel *Invisible Man*." *Man & the Word / Zmogus ir zodis* 12. 3 (2010) : 43-50. *Humanities International Complete*. Web. 10 January 2018.
- Mills, Nathaniel. "Playing the Dozens and Consuming the Cadillac: Ralph Ellison and Civil Rights Politics." *Twentieth Century Literature* 61.2 (2015) : 147-72.
- Nixon, David, and Nick Givens. "Queer in England: The Comfort of Queer? Kittens, Teletubbies and Eurovision." *Queer in Europe: Contemporary Case Studies*. London: Routledge, 2011. 41-56.
- Parrish, Timothy L. "Ralph Ellison: The Invisible Man in Philip Roth's *The Human Stain*." *Contemporary Literature*. 45.3 (2004) : 421-59.
- Podhoretz, Norman. "What Happened to Ralph Ellison." *Commentary* 108. 1 (1999) : 46-58.
- Puskar, Jason. "Risking Ralph Ellison." *Daedalus* 138.2 (2009) : 83-93.
- Rampersad, Arnold. *Ralph Ellison: A Biography*. New York: Vintage, 2008.
- Taylor, Jack. "Ralph Ellison as a Reader of Hegel: Ellison's *Invisible Man* as Literary Phenomenology." *Intertexts* 19:1/2 (2015) : 135-54.
- Valkeakari, Tuire. "Secular Riffs on the Sacred: Ralph Ellison's Mock-Messianic Discourse in *Invisible Man*." *Bloom's Modern Critical Views: Ralph Ellison*. New York: Bloom's Literary Criticism, 2010. 173-98.
- Wright, Richard, and Edwin Rosskam. *12 Million Black Voices*. New York: Basic Books, 2008.